《正岡子規（36）の続き》その268
子規周辺の人びと（十八）

平岸　三八

子規が大学で学んだ外人教師としては、リースとブッセが知られている。共にドイツ人である。専門の著書もあり、かなりの学者である。

明治政府はよくも、この極東の涯の日本に、各国から優秀な学者を招いたものと感心させられる。

子規が哲学を学んだブッセであるが、講義は何語でしたのであろう。リースは英語でしたが、ドイツ人の英語は解し難いと子規は言う。もともと英語があまり得意でなかった子規であるから、出席してもよく分らず、欠席勝ちとなる。ブッセの場合も英語でしたのであろう。サブスタンスとか、レアリティーとか、英語での説明があったようである。

滅多に哲学の講義を聞きに行かないのだから、子規自身のノートがある訳はない。誰かに借りるか、或は既に数年来、代々受け継がれているノートを先輩から譲り受けたものかもしれない。それも英文のものか、和訳されたものかも子規は書きしるしていないが、それが蒟蒻版（こんにゃくばん）だと記している。最も簡単な謄写板の一種である。

こんども試験前三日に、友人の来ない、しかも閑静なところで勉強しようと、下宿を出て向島の木母寺の境内の茶店に行って、そこのかみさんにどこか近くの百姓家か何かで一間借りてくれないかと頼んだところ、二、三日なら幸いうちの二階があいているから泊ってもいいという。

大喜びで二階に上り、蒟蒻版を読み始めたが、何だか霧がかかっているようでありよく分らぬ、哲学も分らぬが、蒟蒻版もはっきりしない。おまけに頭脳が悪いときている。二十頁も読むといやになり、手帖をもって散歩に出る。折柄晩春のいい気候である。野道を行くと非常にいい気持である。脳病など忘れたようで、つい俳句が浮ぶ。一時間ほども散歩して帰ると、疲れていて直ちにノートを読む気になれず、手帖に書かれた俳句を直しなどして、名句らしいとひとり嬉しがっていた。

結局、三日の間にノートをやっと一回半ばかり読んで試験を受け、どうやら済んでしまった。尤もブッセ先生は落第点はつけないそうで、試験がほんとうに出来たものかどうか分ったものではない。

いろいろ子規と試験のことを書いた。子規は学問については、さまで嫌ってはいない。むしろ学問そのものについては、大いに興味もあり、関心もあったが、それについての試験ということになると、虫が好かぬというか、平常の欠席勝ちなどで、試験の準備が充分出来ていないから、泥縄式でどうやら危ない綱わたりで過してきたらしい。しかしそれも最後には、大学卒業を断念するという結果となった。郷里を初めて離れる際、親戚や知友が「勉強」といって送ってくれたのは、遂に実を結ばぬこととなった。

また「息災」といわれたことは、もともと蒲柳の質をというほどのことはなく、色白だった（或は蒼白だから貧血質だったかもしれないが）が、ボートを漕いだり、殊に野球には熱心で、捕手をつとめたくらいの運動好き（野球殿堂に祭られたくらいだ）で、散歩や徒歩旅行を好んだにも拘らず、肺結核から発して全身を結核菌に食い荒されて、病床六尺に釘付けとなり、阿鼻叫喚の晩年を送ることとなったのだから、これも郷党の希望に沿うことができなかったことは、如何ともしがたいことであった。

筆まめで、記録魔である子規は、学校の身体検査の結果を「活力統計表」として「筆まかせ」に残していることは、本稿（七百十六）と（七百十七）に記載した。明治18年6月から、同23年12月に亘るもので、子規の17歳10ヵ月から、23歳4ヵ月の間の6度のものであるが、これを見ても子規が決して貧弱な体格の所有者ではなく、当時としては中等度の部類にはいることは間違いない。

但し、少し長く大声を発すると声がかれたというから、咽喉か肺臓に何か多少の欠陥があったかもしれない。しかしそれでも、中等校以来演説を好んでしたのだから、特に気にかけることではなかった。